

# NEWSLETTER

日本保健物理学会

No.25 June, 2001

## 目次

企画案内.....	1
保健物理学会シンポジウム.....	1
保健物理学会主催「夏の学校」開校のお知らせ.....	2
理事会報告.....	2
平成12年度第6回.....	2
平成13年度第1回.....	3
平成13年度第2回.....	3
企画委員会報告.....	4
平成12年度第3回.....	4
平成12年度第4回.....	4
平成13年度第1回.....	5
編集委員会報告.....	6
平成13年度第1回.....	6
専門研究会報告.....	6
「人為的に高められた環境放射線」専門研究会.....	6
「自然放射線研究と公衆の放射線理解」専門研究会.....	7
「魅力ある保物 Web サイト」専門研究会.....	8
若手研究会.....	8
各種委員会.....	8
ICRP 勧告検討委員会.....	8
線量測定マニュアル出版委員会.....	9
人材育成検討委員会.....	9
非電離放射線研究検討会.....	9
身元不明線源問題検討委員会.....	9
学会掲示板.....	10
国際放射線防護学会の活動について.....	10
アジア・オセアニア放射線防護協議会報告.....	11
学会刊行物の案内.....	12
会員コーナー.....	12
ワークショップ「クラークの提案は新たな放射線防護体系のパラダイムとなり得るか」の印象記.....	12
アメリカ保健物理学会年会に出席して.....	13
その他.....	14
NewsLetter への会員投稿のお願い.....	14

## 企画案内

### 保健物理学会シンポジウム

新 ICRP 勧告へ向けたクラーク提案に対する保健物理学会意見 - ICRP 勧告検討委員会中間報告案 -  
(主催:企画委員会、ICRP 勧告検討委員会)

ICRPはクラーク氏が提唱している新しい放射線防護体系に基づく基本勧告を2005年以降に出すことを計画しています。ICRP 勧告検討委員会では、クラーク提案に対する保健物理学会としての考え方を議論してきました。本シンポジウムは、この委員会の中間報告案に対する保健物理学会員の意見を求めるとともに、放射線防護の考え方に対する活発な議論の場として企画するものです。多くの学会員のご参加いただき、クラーク提案に対する議論を深めていきたいと考えています。

1.日時:平成13年8月9日(木)13:30~16:40

2.場所:文京区シビックセンター

多目的室(地下1階)

[文京区春日1-16-21 TEL:03-3812-7111]

営団地下鉄丸の内線・南北線 後楽園駅徒歩1分

都営地下鉄三田線・大江戸線 春日駅 徒歩1分

JR総武線 水道橋駅 徒歩8分

<http://www.city.bunkyo.tokyo.jp/shisetsu/civic/civics.html>

3.プログラム

座長:原子カシステム研究懇話会 大塚益比古

(1)クラーク提案の概要と課題(13:30~14:00)

大塚益比古

(2)パネル討論(前半)(14:00~15:00)

ICRP 勧告検討委員会中間報告案について

-各課題に対する議論-

パネラ:菊地 透(自治医大)、加藤正平(原研)、

土居雅広(放医研)、百瀬琢磨(サイクル

機構)、吉川 進(東電)

(3)パネル討論(後半)(15:10-16:40)

ICRP 勧告検討委員会中間報告案について

- 総括的討論 -

課題：1.放射線防護体系における放射線影響の考え方

2.クラーク提案に現れたICRPの新しい姿勢

・societal-oriented から individual-oriented への移行

・自然バックグラウンドとの比較

・クラーク・スケール

・正当化、最適化、ALARP

・集団線量

3.公衆被ばくへの取り組み方

4.医療被ばくへの取り組み方

5.線量の考え方(線量計測量、加重係数)

4.参加費： 学会員 2,000円

非会員 3,000円

学 生 1,000円

5.問い合わせ先： 公衆衛生院 緒方裕光

Tel : 03-3441-7111 Fax : 03-3446-4314

E-mail : ogata@iph.go.jp

注)登録は不要です。当日、会場受付へ直接お越しください。なお、委員会の中間報告案につきましては、保健物理学会ホームページに掲載を予定しています。

**保健物理学会主催「夏の学校」開校のお知らせ**

昨年夏、初めての試みとして、保健物理学会主催の「夏の学校」を開校したところ、非常に好評であったので、今年も開校することになりました。

昨年のテーマは「リスクコミュニケーションに学ぶ」でした。今年は、その路線を引き継ぎつつ、内容を少し変えて「放射線リスクとつき合う」をテーマにいたします。

まず、初日にリスクを認知するために、基礎となるべきデータが、どのように取られ、解析されているかをもう一度整理した上で、2日目には社会心理学的な見地からの解釈も入れ、一般の人々が理解できるような放射線リスク説明の可能性について、あるいは合理的な放射線防護のありかたについて、多方面の方々に集まっていた議論することを考えております。学会員以外の方も歓迎ですので、周りの方にも声をかけていただいて気軽にご参加されることを期待しております。

1.日時：平成13年8月23日(木)12:00 - 17:00

24日(金)9:30 - 17:00

2.場所：大阪・中之島プラザ会議室

〒530-0055 大阪市北区中之島6-2-39

Tel : 06-449-6901 Fax : 06-449-6910

3.テーマ：放射線リスクとつき合う

4.内容

(1)疫学、生物学から見たリスク

放射線影響の疫学的研究(原爆被爆者調査を中心として)

清水由紀子(放影研)

UNSCEARにおけるリスク

岩崎民子(放医研)

身近な化学物質のリスク

栗原紀夫(アイトプ協会)

(2)社会心理学的に見たリスク

リスク認知の特異性

中谷内一也(帝塚山大)

技術としてのリスクコミュニケーション

木下富雄(甲子園大)

私と放射線リスク(参加者による討論)

5.参加費： 学会員 5,000円

非会員 6,000円

(懇親会費：3,000円)

6.参加者定員：先着50人

7.交通手段

市バス利用：JR大阪駅から市バス53船津橋行き船津橋から徒歩1分

JR利用：環状線野田駅から徒歩15分

東西線新福島駅から徒歩15分

8.宿泊：シングル20室(中之島プラザ)確保しています(税込6,300円)ご利用ください。

9.参加申込等

宮崎振一郎

〒530-8270 大阪市北区中之島3-3-22

関西電力原子力事業本部保安管理グループ

Tel : 070-5938-2919

E-mail : k576619@kepeco.co.jp

小川喜弘

〒577-8502 東大阪市小若江3-4-1

近畿大学工学部原子炉工学科

Tel : 06-6721-2332(4363)

E-mail : ogawa@ned.kindai.ac.jp

**理事会報告**

**平成12年度第6回理事会(平成13年3月28日)**

理事及び監事改選後初めての新旧合同理事会のため、各自自己紹介を行ったのち、理事会審議に入った。石黒会長より、IRPA10組織委員会の解散に関して日本学術

会議との合意書を今年2月取り交わしたこと、放射線影響研究功績賞は審査の結果、放射線影響学会推薦の二階堂氏に決定したこと、学術会議核科学総合研連放射線科学専門委員会は「保物問題」についての会合を4月から5月に開催することとなり、保健物理学会からメンバーを推薦することとなったこと、が報告された。企画委員会活動について、インターネットグループ活動に必要な経費を予算化することとなった。編集委員会活動に関して、投稿資格が議論され、会員に限定しないことに決定し、規約の第1条を削除し、変更を学会誌の会務報告で知らせることとなった。投稿者の全員が非会員の場合は投稿料を徴収することとした。保健物理学会将来問題検討委員会の活動報告があり、報告は学会誌にて報告し、報告書の提案等への対応は次期理事会がすることとなった。学会賞について、学会賞選考委員会の検討結果報告書をもとに審議した結果、受賞者をつぎのとおり決定した。功労賞：草間朋子(大分県立看護科学大)、加藤正平(原研)、石田順一郎(JNC)、井上康(放射線影響協会)の各氏、文賞：保田浩志氏(放医研)、励賞：卓維海(名古屋大学)、高橋知之(京都大学)の各氏。会費の長期滞納者の扱いについて、会費についての取り扱いを審議した結果、説得により残留する可能性のある会員を除き、5年間以上滞納している会員47名を除名処分することとした。除名者名は会務報告にて掲載することとなった。総会資料の12年度活動報告及び決算について検討した。放射線防護問題協議会(JARAP)に関してJARAPの運営委員として、草間朋子会員及び石黒秀治会員を推薦することとした。

### 平成13年度第1回理事会(平成13年3月28日)

旧理事の退席の後、平成13年度第1回理事会を開催した。出席者は次の新理事の各氏並びに事務局：飯田、占部、甲斐、中村、野口、野本、藤高、水下、松林、宮部、吉川、監事 石黒、征矢、事務局 熊澤。まず、会長、副会長、総務理事、会計理事を次のとおり決定した。会長：中村尚司、副会長：飯田孝夫、総務理事：野口宏、会計理事：野本健二。会長等の選任ののち、旧理事会メンバーがオブザーバーとして加わり、理事会を継続した。理事の担当について、企画委員長及び編集委員長にはそれぞれ飯田副会長、藤高理事に決まった。AOARP担当理事を指名することとし、担当は甲斐理事とした。国際担当の理事を置き、加藤 IRPA 理事を担当理事として会長指名にすることとした。また、その他の所掌事項を決め次回理事会にて各理事に割り当てることとした。総会資料について13年度事業計画(第4号議案)を審議した。特に次の事項を事業計画に明記することとなっ

た。AOARP 活動を促進すること、IRPA との連携を教化すること、医療分野、RI 利用分野の取り組みを強化すること、保健物理研究センター構想については学術会議核科学研究連合を通じて提案することを検討することとなった。平成14年度研究発表会について北陸地区で開催できるか否か、小村会員に会長から打診することとなった。

(12年度総務理事 原研 加藤正平)

### 平成13年度第2回理事会(平成13年5月23日)

場所：東北大学サイクロトロン・ラジオアイソトープセンター会議室

出席者：中村(会長)、飯田、甲斐、加藤、野口、野本、松林、水下、宮部、吉川、飯本(小佐古代理)、鈴木(小村代理)、石黒(監事)、征矢(監事)、熊澤(事務局)

議事概要：

- 1) 編集委員長を藤高理事から小佐古理事に交替すること及び金沢大学小村和久氏を会長指名理事とすることが承認された。理事の役割分担を以下のように追加した。占部逸正：企画・人材育成、小村和久：第36回研究発表会大会長、松林秀彦：企画・将来検討、水下誠一：ICRP、宮部賢次郎：ライセンス、吉川進：広報。
- 2) 企画行事について、「保物セミナー2001」は事前に協議すること、「夏の学校・放射線リスクとつきあう(仮称)」において対象とする女性は看護婦や医師などの医療分野の女性がよいこと及び都会ではなく涼しい場所で開催すべきである等の意見があった。また、NEWSLETTERの電子配布に関するアンケートを6月発行のNEWSLETTERに同封することが承認された。
- 3) 研究発表会のポスター賞の受賞結果は学会誌に掲載することとし、掲載方法は次回編集委員会で検討することとした。
- 4) 第36回研究発表会は金沢大学小村和久氏が大会長となること、開催日程及び場所は検討中であることが報告された。
- 5) 研究発表会中に韓国放射線防護学会との会合を開催し、国際会議、AOARP活動、年会への相互派遣について検討することが報告された。4月29日~5月1日にブラジルで開催されたIRPA理事会の概要が紹介され、AOARPの発足を報告したこと、スペインで開催予定の第11回IRPA国際会議の準備状況などが報告された。
- 6) ICRP勧告検討委員会の活動に関して、ICRP勧告検討委員会の報告は学会誌にも掲載すべきであること、

ICRP への発信は、ICRP 勧告検討委員会の中間報告書を作成し、理事会承認を受け、9月のICRP委員会を  
目途とする等の議論があった。

- 7) 身元不明線源問題検討委員会の活動に関して、「Orphan Source」の訳は学会として「身元不明線源」とすることとした。
- 8) 線量測定マニュアル出版委員会の活動に関して、マニュアルはアイソトープ協会ルートで丸善出版から出版すること、ドラフトを理事会に配布し、コメントを求めること、会員特定販売とすることなどが議論された。
- 9) 将来検討委員会の提言は、今後企画委員会で検討し、具体化を図ることとした。
- 10) 1~3月入会者からは入会年度分の会費を徴収しないよう事務局で対応することとした。また、保物学会のロゴ及びレターヘッドを公募することとした。  
(総務理事 原研 野口宏)

## 企画委員会報告

### 平成12年度第3回企画委員会(平成12年12月21日)

出席者: 飯田孝夫(委員長)、金子正人、甲斐倫明(以上、企画担当理事)、安東 醇、緒方裕光、小林文博、床次眞司、野口 宏、野村紀男、早川博信、平山英夫、宮崎振一郎(以上、委員)、江田和由(オブザーバー: インターネットグループ 主査)、服部隆利(幹事、委員)

#### 議事概要:

- 1) 保物セミナー2000の報告がなされた。セミナーは、10月5、6日に開催。参加者は266名。次年度は、同様のセミナーを、平成13年10月4~5日に、京都駅前あるいは大阪駅周辺で開催することが第一候補。次年度の内容・テーマに関するアンケートは来年4月頃に行い、5月後半から詳細検討を開始する予定。実行委員会に参加を要請する企画委員は、4月以降、新しい企画委員会が組織された時点で決定する。
- 2) 勉強会「UNSCEAR2000年報告」の準備状況が報告された。開催は、2月26日(月)13:30~17:00を予定。担当は、床次、服部の両委員。座長は、甲斐氏、講演者は、自然放射線(能): 藤高氏、人工放射線(能) 浅野氏、生物影響: 佐藤氏、疫学: 吉本氏を予定。
- 3) 金属スクラップメタル問題検討委員会(仮称)について、検討状況が報告された。また、検討中であつたリスクコミュニケーションに係る専門研究会(仮称)については、取り下げることとなった。

4) 以下の専門研究会の活動状況が、下記の各委員より報告された。

- 「放射線管理業務委託化専門研究会」(小林)
- 「人為的に高められた環境放射線専門研究会」(床次)
- 「自然放射線研究と公衆の放射線理解専門研究会」  
(早川)

5) インターネットグループの活動が報告された。メーリングリストの現登録数は515件。受取人不明メールが20通あり、そのアドレスは、受取人不明の発生した回数、期間を考慮してインターネットグループの判断で削除してよいこととする。ニュースレターは、12/18に入稿済み。AOARP(アジア・オセアニア地区放射線防護協議会)のホームページに、保物ホームページがリンクされた。

6) ホームページに掲載することを目的とした放射線の知識に関するコンテンツ案が紹介された。保物学会でブックレットを作成してはどうかという提案がこの懸案の始まりであるため、保物学会として、ホームページを利用し、ICRPの考え方を広く分かりやすく紹介することを考えることも提案された。

7) IRPAからの“学会は倫理規約を持つべき”との提案ならびに米国の放射線防護学会、オーストラリアの放射線防護学会の倫理規約が紹介され、本学会の倫理規約について議論がなされた。

### 平成12年度第4回企画委員会(平成13年3月23日)

出席者: 飯田孝夫(委員長)、金子正人、甲斐倫明(以上、企画担当理事)、征矢郁郎(小林代理)、床次眞司、野口 宏、野村紀男、早川博信、宮崎振一郎(以上、委員)、江田和由(オブザーバー: インターネットグループ 主査)、服部隆利(幹事、委員)

#### 議事概要:

- 1) 勉強会「UNSCEAR2000年報告」の報告がなされた。参加総数は49名。収入96,000円、支出82,645円で、13,355円の黒字となった。黒字の原因は、会場費が不要で、放医研の講演者から謝金の辞退があつたため。
- 2) 当日午後に予定されていたワークショップ「クラークの提案は新たな放射線防護体系のパラダイムとなり得るか」の準備状況が報告された。
- 3) 1月19日の理事会で承認された身元不明線源問題検討委員会の設置の提案が紹介された。委員長は、飯田委員長、幹事に甲斐委員、委員として山崎(千代田テクノル)、五味(日本アイソトープ協会)、高橋(京大炉)、中里(慶応大学)で活動を開始する予定。理事会のものに置かれ、活動は1年間。
- 4) 以下の専門研究会の活動状況が、下記の各委員より報告された。

「放射線管理業務委託化専門研究会」(征矢)  
 「人為的に高められた環境放射線専門研究会」(床次)  
 「自然放射線研究と公衆の放射線理解専門研究会」  
 (早川)

- 5) 新規専門研究会について議論がなされ、今後は、若手と女性にも注目すべきで、そういう方達が魅力を感じるテーマ探しが重要であり、企画委員会としては学会活動に関心のある女性会員に声をかけて、専門研究会を自主的に立ち上げるためのサポートをすることとなった。
- 6) 保物セミナー2001(仮称)は、4月にも実行委員会が立ちあがる。積極的に保健物理学会の意見を反映させるため、企画委員会からは、新規企画委員会の関西地区メンバーを加えることを検討することとなった。
- 7) ホームページコンテンツの作成について議論がなされ、実施グループとして、たとえば研究発表会でメンバーを集め、専門研究会として組織する方法もあり、コンテンツの原案作成、専門的な情報の発信方法などを検討する場として、新規専門研究会の発足を検討することとなった。
- 8) インターネットグループのボランティア作業には限界があるため、必要な活動予算をつけるよう働きかけることとなった。
- 9) インターネットグループ活動が報告され、ニュースレターを電子配布した場合の効果見積りが紹介された。ホームページへの質問箱の設置については、上記の新規専門研究会の中で検討することとなった。
- 10) 次年度の新規企画委員会への引継事項として、夏の学校は今後も続け、他の企画行事は、年3回程度とすることが決定した。

#### 平成13年度第1回企画委員会(平成13年5月18日)

出席者: 飯田孝夫(委員長)、松林秀彦、占部逸正(以上、企画担当理事)、緒方裕光、小川喜弘、遠藤 章、鈴木昇一、土井 徹、宮崎振一郎、(以上、委員)、服部隆利(幹事、委員、インターネットグループ 主査)

#### 議事概要:

- 1) 新しい企画委員会の委員紹介がなされた。企画委員会の役割が確認され、昨年からの企画行事の参加費を値上げしていること、ニュースレターは、今年度から、3月、6月、9月、12月の年4回の発行することが確認された。
- 2) ワークショップ「クラークの提案は新たな放射線防護体系のパラダイムとなり得るか」の実施報告がなされた。3/23に文京区シビックセンターで開催され、参加総数は80名。大塚益比古座長から、ICRP勧告検

討委員会の活動概況説明がなされ、以下、放射線の健康影響(放医研、土居)、線量の考え方(JNC、百瀬)、防護システムと原則(原研、加藤)線量レベル(福大、占部)、医療被ばくについて(自治医大、菊地)の順で発表がなされた。総合討論では、大塚座長が、会場からの質問に応えながら討論が行われた。

- 3) 保物セミナー2001準備状況が報告された。4月上旬に、準備委員会を開催し、テーマ、場所及び時期について検討した。現段階では、まだセミナーの実行委員会が決まっていないが、テーマ等について、メールで収集した企画委員の意見も含めてアンケートを作成し、昨年保物セミナー2000作成した参加者メーリングリストに出して意見集約する予定。開催場所は、大阪か京都が候補。日程は、10月初め頃を目途にしているが、アンケートでは夏～冬の間で意見を聞く予定。5月中旬に、具体的な検討を行う実行委員会を関西で開催予定。
- 4) ICRP勧告検討委員会に係る企画行事は東京で開催することとした。担当は緒方委員、土井委員。8月上旬の開催を目途に、主にICRP勧告検討委員会と日程調整。報告書のまとめ方、ICRPへの情報発信の方法については、理事会で検討。
- 5) 夏の学校は、リスクとコミュニケーション、広報とコミュニケーションという考え方で、自然放射線研究と公衆の放射線理解専門研究会の協力を得て、夏の学校を企画することが可能であるため、テーマ名を「放射線リスクとつきあう(仮称)」とし、女性、リスクマネジメントなどをキーワードに企画することとなった。担当は、占部委員、小川委員、宮崎委員。開催場所は、昨年と同じ中之島プラザを第一候補。開催時期は、8月下旬を目途に、宮崎委員が確認することとなった。
- 6) 保物学会HP一般向けコンテンツ検討グループ(仮称)は、主査の野村委員欠席のため議論できなかったが、研究発表会会場で若手参加者を募ることとなった。
- 7) 以下の専門研究会の活動状況が、下記の各委員より報告された。
  - 「放射線管理業務委託化専門研究会」(土井)
  - 「人為的に高められた環境放射線専門研究会」(床次)
  - 「自然放射線研究と公衆の放射線理解専門研究会」  
(小川)
- 8) インターネットグループ活動報告がなされた。次期体制は、主査: 服部、メーリングリスト班: 江原、奥野、ホームページ班: 赤羽、栗原、江田、ニュースレター班: 山崎、稲垣、伊知地、顧問: 甲斐、の体制となった。ニュースレターは、3月、6月、9月、12月を目途に、

年4回発行する予定。インターネットグループ内で、ニュースレターの電子配付について議論した結果を報告した結果、理事会の承認を待って、6月発行のニュースレターに同封して全員にアンケートを送ることとなった。  
(電中研 服部隆利)

## 編集委員会報告

### 平成13年度第1回編集委員会(平成13年6月1日)

平成13年度第1回目の編集委員会は、6月1日に引継ぎを兼ね、新旧合同委員会として行われました。小佐古敏荘委員長(東大)のもと、高橋知之氏(京大炉)、古川雅英氏(放医研)の2名新委員を迎えた新体制で進めることとなりました。幹事は杉浦紳之(東大)が務めさせて頂きます。

編集委員の主要な任務の1つとして、投稿論文の査読を円滑に進めることがあげられます。このところ3審、4審となるケースがままありますが、この対策としては長期化しない迅速な査読が進むような編集委員会側のシステム造りと投稿者のご協力が必要です。中村尚司前編集委員長もこの点を気にされており、何らかの具体策を進めていこうと考えています。

近年、電子ジャーナル化の動きが活発化してきています。また、先に仙台で行われました研究発表会では将来問題検討委員会の報告がなされ、学会誌のあり方に対しても提言がなされています。これらの対応を含めて、多くの会員により望まれる形での学会誌づくりをすべく、会員のニーズを知るためのアンケート調査を企画しています。

皆様の活発な投稿をお願いするとともに、新体制の編集委員会に対するご協力をよろしくお願いいたします。  
(東大 杉浦紳之)

## 専門研究会報告

### 第4回「人為的に高められた環境放射線」

#### 専門研究会

開催日時：平成13年5月23日(木)

開催場所：仙台市内

出席者：8名

本研究会は、人間の活動領域の拡大に伴って高められ

る環境放射線に着目し、これまで得られたデータを整理しつつ、将来の環境放射線による過剰な被ばくの可能性について議論し、また健康影響も視野に入れてその防護に役立てることを発足の目的としている。今回は第4回目の会合で、「オフィスビルにおけるラドン・ラドン娘核種の挙動」、「航空機搭乗における宇宙線線量」について各委員からの報告があり、それぞれの報告に対して活発な議論がなされた。次回は7月下旬または8月上旬に名古屋周辺で行うことを予定している。

(放医研 床次眞司)

### 第2回「自然放射線研究と公衆の放射線理解」

#### 専門研究会

開催日時：平成13年1月27日

開催場所：神戸商船大学の総合学術交流棟ゼミ室

出席者：9名

「私がしている放射線(放射能)の説明」というテーマで、5人が話題を提供し、議論した。

#### 1) 学内RI講習(大崎 進)

九州大学で行っているRI講習の中の「放射線の人体への影響」に関する1.5時間の内容の紹介をした。受講者は4年生とM1で300人程度である。自然放射線源からの被ばくで話が始まる。この講習は一般公衆を対象としたものとは異なる。目的は、RI利用者が適度に怖がり自主管理できるようになることにある。講習に対する反応は感想文で見られるが、人数も多く義務としての講習なので、理解の程度は測れない。生物影響のプロではないので、わからないところはわからないと言う。

#### 2) 放射能(線)の理解 -効果的なコミュニケーションのために-(占部逸正)

方法について考え整理した。(1)どのような人を対象にするのか?(2)テーマの設定、相手を公衆としたとき、その立場や要求は様々であり把握は難しい。(3)伝える側と聴く側の温度差、意見する主婦は一所懸命で「日常の心配事」の熱が伝わってくる。一方で専門家はさめた説明で「また言うとするわ」と思われる。(4)正確に伝えるとはどういうことか?断定的表現や比喩は正確さから遊離してしまう。(5)相手が理解しにくいと予想されるときどう対応するか。(6)話に納得するのか、人柄を理解するのか?わかってほしいことを納得してもらうには時間がかかる。

理解・納得には時間がかかり段階がある。CM用語にAIDMAがある。Attention, Information, Desire,

Motivation, Action の頭文字を並べたものである。コミュニケーションの対象は様々な段階にあるので、ターゲットを絞った方法や内容を吟味することが重要である。

### 3) 研究所一般公開での説明(山西弘城)

宇宙線飛跡検出器(スパークチェンバ)や霧箱を見たときの質問とそれに対する回答。放射線やトリチウムが怖くないかという感想に対する説明について紹介した。

いずれの説明も簡単に厳密性に欠け誤解を招くという指摘があったが、説明時間の制約から短いフレーズで感覚的な説明にならざるを得ない。理解に応じた段階的説明や多様な材料を準備しておく必要がある。排出限度の説明は難しい。全く出ないわけではない。これに対し、福井県には20年前からデータがあり、規制値との関係だけではなく、実測データの積み重ねを示し、理解につながっている。公衆は線量や影響について自然バックグラウンドなしと捉えているので、その意味で自然放射線に関する知識の普及は重要である。また自ら測ったデータは説得力を増す。

### 4) 一般府民に対する放射線・放射能の啓蒙など

(恵 和子)

一般成人府民を対象に講義と実習を行ったこともある。講義は短時間で実習を中心とし体で感じてもらう。一般府民を対象とする場合は年齢、性別常識などが異なるため興味の焦点を絞るのが難しい。一番の興味は人体に対する放射線の影響のように見えた。?

用語は質問者に合わせ、また、世間で使っている用語を取り入れて説明するように務めたが受け側とズレている場合もある。(例;放射能と放射性物質)。専門家の間では用語は厳密に使う必要はあるが言葉、文字だけで想像できないものは、説明し難い。(例;実効線量、1cm線量当量)。専門家にも説明し難い用語を、公衆にわからせるのは困難。公衆のための言葉遣いにする事も重要である。実習には驚きがある。実習用の教材には、グローランプ、人体中のカリウムと同量程度を含む塩化カリウムの粉体、集塵したフィルタ、湯ノ花、土壌、カリ肥料、マレーシアの砂、脱臭剤などがある。「ラドン?聞いたことあるわ」という反応もあり、公衆の経験にそったきっかけづくりや説明が求められる。

### 5) 大学講義における放射線関連量の教え方の一例

(小田啓二)

講義の一端を紹介した。放射線関連量やリスクの説明に身近な事象で喩えたり、事件についての批判的な見方を紹介したりして、興味・関心の持てる説明にし

ている。

学生を眠らせない。簡単なことを繰り返してわかった気にさせる。これ以上に重要なのは話す側のスタンスであろう。話し手が信頼されること、認知されることである。ものを批判すると一部同調してくれる。この同調(あるいは反発)の中に、説明を一方通行にさせないでコミュニケーションにする芽がある。

以上の他に、昨年度の専門研究委員会の報告書「自然界の放射線(能)の面白さ、相互理解の掛け橋に」が完成間近であることが報告された。

(核融合研 山西弘城)

## 第3回「自然放射線研究と公衆の放射線理解」

### 専門研究会

開催日時:平成13年3月30日

開催場所:神戸商船大学 総合学術交流棟ゼミ室

- 1) 占部氏(福山大)は、白尾隆行(核燃料サイクル開発機構)の解説に基づきフランスの国民に対する原子力の説明の仕方を紹介した。ここでは、セーヌ川上流の原子力発電所の事故対策、高速炉の開発がコストとの係わりで判断されていること、さらに数百年にわたる工場監視の実例などが分かりやすく「原子力110の質問」に収められていることが紹介された。
- 2) 小川氏(日本原子力発電)は、多くの女性に原子力を分かってもらいたい気持ちから「原子力が興味の尽かないライフワーク」となった経緯や女性の立場を生かした広報活動の在り方を紹介した。氏は、私たちに、燃料を模したツール使い、専門用語を避けて、ゆっくりと会話を楽しむように原子力を説明することの大切さを将に実践的に紹介した。
- 3) 恵氏(元大阪府立大学)は、知識普及活動の経験について、科学の祭典で、身近な話題で放射線測定することの説得性や、その際、  
、  
の各測定器を利用するとさらに面白くなることなどを紹介した。また、数年前に保物の専門研究会をベースに開始された「教科書に見られる原子力・放射線の取り扱い方」の調査結果を紹介し、放射線利用のいい面の宣伝が少ないことも一因ではとコメントした。
- 4) 飯田(名大)は、学内での講義での原子力や放射線利用の取り扱いを紹介するとともに、学会活動としてのオープンスクールで、原子の力と原子の不思議を体験コーナーと学習コーナーに分けて学習するユニークな活動を紹介した。また、サイエンス2000では放射線の不思議さを取り上げ、また、目で見る放射線を

強調するなど公衆の関心を引き出しながらの活動が紹介した。

(福山大 占部逸正)

### 「魅力ある保物Webサイト」専門研究会

原子力施設等における被ばく事故、放射性物質の紛失、一般廃棄物の中への放射性物質の混入等を契機に、今までは一部の専門機関や医療機関での技術的課題であった保健物理に関する事項が一般住民の身近な話題となっています。また、現在広く知られている保健物理に関する情報には、知識として間違っただけのもも多く、正しく理解していただくことが必要であり、政府機関では、様々な方法を用いて啓蒙活動を実施しています。

一方、保健物理分野では研究関連技術の発達により、最新の知見が国内外で報告されており、国内の専門家が簡単に情報を入手できるネットワークの必要性も高まりつつあります。

保健物理学会は、保健物理に関連する専門家により構成されている学術的・技術的な機関であるとともに、保健物理分野の幅広い情報を集約できる機関です。従って、これまで以上に学会員が必要な情報を入手しやすく、また様々な方が持つであろう保健物理に関する最新情報や疑問等に答えていく役割が求められていると考えております。

最近では、ITの発達によりインターネットを通じて様々な情報を発信・入手することができます。現在も保健物理学会専用のホームページがありますが、以上のことを鑑み、さらに魅力ある保物Webサイトを構築していきたいと考えております。

学会員の皆様にも意見をいただきつつよりよいものを目指したいと考えておりますので、ご協力方よろしく申し上げます。

(サイクル機構 野村紀男)

### 若手研究会活動報告

若手研究会は企画委員の専門研究会の一つとして1987年に設立されました。本研究会は、35歳以下の会員で構成されており、現在会員数は35名となっています。若手研究会の主な活動

#### 1) 夏期セミナーの開催(年1回)

会員の関心事やその時々話題に関してテーマを決め、場合によっては講師の先生をお招きし、自由に議論を行います。今年も企画・検討を開始しており、会員各位には別途日程等詳細についてご連絡いたし

ます。

#### 2) 会合(年数回)

会員相互の交流促進も含め、自由に議論を行います。今年度第1回会合は保健物理学会発表会が開催された仙台にて行い(出席者12名)、今後の活動方針や夏期セミナーのテーマ検討など、その他情報交換も含め幅広く議論を行いました。

#### 3) 若手研究会ホームページの公開

若手研インターネットグループにより、保健物理学会のホームページを通じて若手研究会のホームページを開設しています。ご興味のある方は、是非一度ご覧下さい。

#### 4) 納会など、その他

若手研究会では会員を広く募集しております。35歳以下の学会員であれば、どなたでも入会資格があります。ご関心のある方は下記の主査あるいは地区幹事まで、お気軽にご連絡下さい。

(近畿大 稲垣昌代)

主査 : 稲垣 昌代 (近畿大 原子力研究所)

Tel: 06-6721-2332, Fax: 06-6721-3743

E-mail: inagaki@ned.kindai.ac.jp

東地区幹事 : 大石 哲也 (原研 東海研究所)

TEL: 029-284-3569, FAX: 029-282-6063

E-mail: tetsuya@frs.tokai.jaeri.go.jp

西地区幹事 : 佐瀬 卓也 (名大 アイトブ 総合センター)

TEL: 052-789-2570, FAX: 052-837-7902

E-mail: saze@info.human.nagoya-u.ac.jp

## 各種委員会

### ICRP勧告検討委員会

本委員会は、ICRPが2005年以降の新たな基本勧告として計画している新しい放射線防護体系に関して、その基本的考え方として公表され世界で議論されているクラーク提案を、保健物理学会として検討し意見を集約して学会としての見解をICRPなどに発信することにより、放射線防護体系の国際的な議論に貢献すべく活動することを目的としている。

本委員会が平成12年12月に設置されて以来、クラーク



ク提案に対する保健物理学会としての考え方を議論してきた。平成13年3月23日には東京文京区シビックセンターにおいてワークショップ「クラーク提案は新たな放射線防護体系のパラダイムとなり得るか」を開催して、委員会の検討内容を学会員に報告して意見交換と討論を行うとともに、メーリングリストを通じて学会員の意見を求めてきた。また、仙台における第35回研究発表会では5月24日に委員会報告として活動状況報告と討論を行うとともに、5月17日には来日しているクラーク氏との討論会「クラーク氏とツピアナ氏を囲む会」に参加して保健物理学会の本委員会活動概況の報告と討論を行っている。

これまで、放射線の健康影響、防護システムと原則、線量および線量レベル、医療被ばくについて概括的な議論を行っている。特に、クラークスケール(クラーク氏の提案する線量レベルと対策の関連を示したもので、クラーク提案の中心となるもの)の解釈の困難さ、防護としての正当化の必要性、限度や加重係数の提案における科学的根拠の必要性、医療における利益と防護の考え方を整理する必要性等を指摘している。詳細な議論が必要な課題もあり今後さらに調整して進めていく予定である。

平成13年8月には保健物理学会企画行事としてシンポジウム「新ICRP勧告に向けたクラーク提案に対する保健物理学会意見 - ICRP勧告検討委員会中間報告案 - 」を開催して(詳細は本ニュースレターの企画案内を参照)、委員会の中間報告案に対する保健物理学会員の意見を求め議論してクラーク提案に対する保健物理学会としての意見を集約し、中間報告をまとめる計画である(中間報告書案は保健物理学会ホームページに掲載を予定)。保健物理学会としてまとめたクラーク提案に対する見解は、ICRPなどに発信することを計画している。ICRP勧告検討委員会は、クラーク提案あるいは放射線防護体系に対する保健物理学会員の積極的・建設的な意見を期待している。

(原研 水戸誠一)

### 線量測定マニュアル出版委員会

4月20日までに各委員が分担執筆した最初のマニュアル原稿が出揃い、4月27日に東京大学工学部で第2回の委員会を行った。そこで内容を検討して、それに基づき各委員が担当箇所を修正して、5月21日までに集めることとした。5月28日に第3回の委員会を東京大学工学部で行い、さらに検討を加えて、再修正をおこなうこととし、5月30日までに委員長に提出することになった。

この最終原稿は、文部科学省原子力安全課放射線規制室に持参して、コメントをもらうとともに、序文を依頼することになっている。また、保健物理学会理事会および放射線取扱主任者部会の関係者にもメールで流してコメントをもらうこととした。

出版は日本アイソトープ協会に相談した結果、協会との共同出版として、協会の販売ルートにのせてもらって、丸善から出版してもらうことになった。

最後の委員会は6月30日を予定しており、6月25日までに寄せられたコメントを基に修正等を行い、最終原稿として協会に7月上旬には渡す予定である。出版は8月下旬の予定。

(東北大 中村尚司)

### 非電離放射線研究検討会

我が国初の「全身数値モデル」を開発

様々な電波利用状況に対してきめ細かな安全性評価が可能に

通信総合研究所は北里大学、慶應義塾大学、東京都立大学大学院との共同研究により、我が国で初めて日本人平均体形を有する男女の全身数値モデルを開発しました。女性モデルについては世界でも初めての開発となります。詳細は、<<http://www2.cri.go.jp/pub/whatsnew/press/010426/010426.html>>をご参照下さい。男性モデルを用いた携帯電話使用時の電磁界解析結果例、携帯無線機を胸ポケットに入れている場合の人体周辺の電界強度分布などのカラー図面があります。

問い合わせ先:

独立行政法人 通信総合研究所 無線通信部門

横須賀無線通信研究センター 電磁環境グループ

山中幸雄 Tel 0468-47-5090, Fax 0468-47-5099

渡辺聡一 Tel 042-327-6512, Fax 042-327-6675

(宇都宮大 上村佳嗣)

### 身元不明線源問題検討委員会

世界的に金属スクラップ中に放射性物質が紛れ込む事件が発生している。我が国でも、2000年には、鋼材の原料となる金属スクラップから放射性物質が検出される事件が和歌山、加古川、水島において相次いで発生した。2000年5月に開催されたIRPA-10でも「Orphan Sources & Radioactivity in Scrap Metals」のトピカルセッションがもたれ、世界的に大きな問題になっていることが報告され、各国での対応が急がれている。放射線防護の中心的学会である日本保健物理学会が、身元不明

線源 (orphansources) 問題を把握し、今後の対応を検討しておくことは社会的な使命として重要と考え、検討委員会を設置した。本委員会は2001年4月から発足した委員会で、身元不明線源問題を解決するために今後我が国において何をしなければならぬかを2002年3月までに具体的に提言すると同時に、日本保健物理学会が果たす役割について検討する。Orphan sourcesは、IAEA BULLETIN 41/3/1999によると、次のような線源を含めた制御されていない線源のことを意味する。(1)規制による管理を過去にも受けたことがない線源、(2)過去には規制による管理を受けていたが、遺棄、紛失、あるいは誤配置された線源、(3)盗難あるいは、正当な手続きなく処分された線源、これらの意味において、日本語訳として、「身元不明線源」とした。委員会のメンバーは、飯田孝夫(委員長、名古屋大)、甲斐倫明(幹事、大分看科大)、山崎和也(千代田テクノル)、五味邦博(アイソトープ協会)、高橋知之(京大炉)、中里一久(慶応大)の6名である。現在、委員会では、(1)弱い線源(ラドン健康温泉器など)による社会的混乱防止、(2)強い線源の事故発生の可能性についての検討、(3)スクラップ中の放射性物質の検出システムの検討、(4)諸外国の調査、などを中心に活動を進めている。

(大分看科大 甲斐倫明)

## 学会 掲 示 板

### 国際放射線防護学会の活動について

4月29日から5月4日にかけてイベリア・ラテン地区放射線防護会議に会わせてRecife (Brazil)で開催されました。IRPA理事として出席してきましたので報告します。概要は次のとおりです。

#### 1) 加盟学会に関して

IRPAの加盟関連事項を担当する加盟委員会のメンバーを確定した。また、パナマ、マレーシア、リトアニア、バングラデシュ、ラトビア、シリア、モロッコ、ベラルーシ及びシンガポールの加盟申請を審査することとした。

日本から2000年12月、日本保健物理学会、韓国、中国、インド及びオーストラリア・ニュージーランドの5学会でアジア・オセアニア協議会を発足させ、ウェブ・サイトの開設、2002年10月、韓国にて第1回アジア・オセアニア協議会国際会議の開催することを報告した。また、未加盟学会に加盟をバングラデシュ等8カ国に打診して、マレーシア等3カ国から

積極的な返事がきていることを報告した。

また、協議会の規約と加入手順案について説明し、審議され、協議会の名称 Association は Federation にすること、加入手続きで定めた条件において、すでに IRPA に加入している学会は自動的に受理とすることとなった。未加入国学会のコンタクト先を IAEA 等から入手することとなった。

#### 2) 第11回国際放射線防護学会国際会議の準備について

国際会議会長 Leopold Arranz から準備組織、プログラム、アナウンスメントの説明がなされ、検討された。

国際プログラム委員会について、委員会の機動性とコスト節約のためコアグループを設置し、これを中心に運営することとした。各テーマの担当を割り当て調整する義務を与えた。その他の委員の作業は投稿された発表のアブストラクトの審査のみとした。プログラムの構成で、総会の開催を会議前日または会議終了後の案が出されたが、会期中に時間を短縮して対応することとなった。

日本から総会の投票は電子式ではどうか提案され、検討することになった。また、日本から、途上国の参加者への経済的支援の基準と選考手順の透明化の確立を要請していたが、その対応として、国際支援委員会を設置することになった。

国際支援委員会は若い研究者、途上国の研究者が会議に参加することを経済的に支援するプログラムであり、支援のための資金源を明確にし、さらに資金源毎の適用対象の明確化と、選考基準をきめる機能とすることになった。

日本での経験から、IAEA等のサテライトミーティングを介しての支援など単純でない支援形態もあること、基準のみでなく手順も明確にすること、スケジュールとして2次アナウンスメントまでには基準等を決定し、明記すべきというコメントをした。

第1次アナウンスメント案について検討した。概要において、Swedish Academy Gold Medal 授与の記事と、若い研究者の参加を促進するための国際支援委員会の設置を記載することになった。

#### 3) 出版活動について

新しい委員会のメンバーが提案され了承された。ホームページによる広報活動を充実させ情報を共有していくという方針のもと、過去10回の国際会議のプロシーディングスを掲載することが採択された。日本から日本開催のIRPA10のプロシーディングスについては5月中には掲載できるよう準備していることを伝えた。

また、これまでの訓練コースのテキストを掲載するなど教育・訓練の情報を充実させること、ならびに重要なイベントの期限を掲載することとなった。放射線防護関連機関の紹介を行うとともに、国際機関の作成した資料に限定してテーマごとに参照できるようにすることとなった。また、トピックスを紹介したり、雑誌の割引情報を知らせることとなった。

#### 4) 教育・訓練への貢献

IRPA の目的のひとつは放射線防護の教育・訓練を通じて向上させることである。その活動の強化について検討し、現在実施している IRPA 国際会議においてリフレresherコースなどを企画すること、IAEA の企画する教育・訓練プログラムに人材をプールすることの強化に加え、IRPA のウェブサイトにて教育・訓練コースを登録すること、適切な人材の発掘に努めることになった。

#### 5) 倫理規定について

次回の総会において採択するよう、手順を確定し取り組むことにし、内容については広報委員会が担当すること、英国学会の規定を参考にし議論するため、web にリンクさせることなどが決まった。

#### 6) 国際関連機関との関係強化について

ICRP に observer の形態で参加することを明記することは困難であるが、実質的にテーマにより参加できることから、ICRP の Secretary でもある J. Valentine が必要に応じ対応することとした。IAEA、NEA 等の個々の機関の担当者を決めて対応することとなった。

ICRP の Clarke 提案については、ICRP との協力の一貫でおこなう、新しい情報を知らせることを予定している。具体的には、当面は来年予定のイタリアでの欧州地区会議で議論されることになるだろうとのことであった。フランスの学会では IRPA10 以降、新たに検討委員会を設置して対応しているとのこと。

#### 7) その他

米国保健物理学学会から最近のカルフォニア州の電力危機、ユッカマウンテンの論争について声明を検討しているが、IRPA もプロ集団として国際的な声明を出すメカニズムを考えたらいかかという、提案があった。しかし、IRPA はいろいろな学会の集合であることから、むしろオープンに議論する場の提供に務めるべきということになった。

IRPA としてメディアとの関係のありかたの議論があり、IRPA はメディアを批判するのではなく、コミュニケーションの関係のあり方をまず検討すべきであるということになった。

Sievert 賞選考委員会のメンバーを承認し、2003 年の理事会議決定に間に合わせるため、2002 年初めに nomination するよう 5 月中にはレターを送付することとなった。

放射線防護関係学会の国際会議を4種類に分類し、IRPA の関与のし方を決めた。

国際会議開催の誘致請願手続きについて、その軽減化、単純化を目的として審議された。解決策として、2 段階にプロセスを検討することとなった。一回落選したものの準備軽減方策も検討することとなった。

4月30日はイベリア・ラテン地区国際放射線防護会議の学会フォーラムに理事会メンバーが出席し、IRPA の活動の概要を説明し、訓練・教育コースへの参加と倫理規定へのコメント要請をおこなったあと、会議に参加していたラテンアメリカ諸国学会参加者との意見交換を行った。

( IRPA 理事 加藤正平 )

### アジア・オセアニア放射線防護協議会報告

AOARP ( アジア・オセアニア放射線防護協議会 ) は、現在、IRPA に加盟している韓国放射線防護学会、中国放射線防護学会、インド放射線防護学会、オーストラリア・ニュージーランド放射線防護学会、日本保健物理学学会から構成されている(詳しいことは、<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jhps/AOARP/> を参照)。AOARP として、加盟国を増やすために、加入手続きの規約作成をすすめる同時に、アジアの8ヶ国に加入を呼びかけている。

5月24日-25日に仙台で日本保健物理学学会研究発表会が開催された際に、韓国放射線防護学会と日本保健物理学学会の合同の会議が開かれた。AOARP は、第1回の Regional Congress ( AOCRP-1 ) を2002年10月に韓国ソウルで韓国放射線防護学会がホストとして開催することになり、その打ち合わせが行われた。会議には、韓国から学会長およびAOCRP-1大会長を含む6名、日本からは石黒前会長、中村会長を含む7名が出席した。招待講演では、ICRP 委員長である Clarke および IRPA 会長の G. Webb が候補として挙げられている。シンポジウムでは、クラーク論文の検討を含めた今後の放射線防護に関すること、および低周波電磁界の防護がテーマとして検討されている。また、早朝にはリフレresherコースを設け、若手研究者などの教育にも配慮することも検討されている。

日本保健物理学学会と韓国放射線防護学会は、AOARP とは別に、両学会の関係を継続して深めていくために、そ

それぞれの年会の中で合同シンポジウムを2年ごとに韓国と日本で交互に実施することで合意した。第1回の合同シンポジウムは今年の11月2-3日に韓国の慶州で開催される韓国放射線防護学会の年会で行われることになった。テーマは内部被ばくに関することになっている。日本からも多くの参加者が期待されている。詳しいことは学会誌やメーリングリストで案内していく予定である。  
(AOARP担当理事 甲斐倫明)

## 学会刊行物の案内

保健物理学会から下記の出版物が刊行されています(括弧内は残部数)。入手ご希望の方は、学会事務センターにお申し込み下さい(送料・税別)。なお、学会の研究発表会や企画行事の際には割引価格で販売している刊行物もあります。

- 1) ICRP Publ.66 新呼吸気道モデル概要と解説(1995)  
1,777 円(19部)
- 2) ラドンの人体への影響評価専門研究会報告書(1998)  
1,700 円(62部)
- 3) 高度人体ファントム専門研究会成果報告書(1998)  
2,000 円(78部)
- 4) 自然界の放射線(能)の面白さ、相互理解の掛け橋に(2001)  
1,700 円(176部)
- 5) 新・放射線の人体への影響(1993)  
800 円(割引販売なし)

連絡先：〒113-8622 東京都文京区本駒込 5-16-9  
学会センターC21  
財団法人日本学会事務センター事業部  
TEL 03-5814-5811 FAX 03-5814-5822  
E-mail: sub@bcasj.or.jp

## 会員コーナー

### ワークショップ「クラークの提案は新たな放射線防護体系のパラダイムとなり得るか」の印象記 (金沢大 鈴木敦雄)

現在、Controllable Dose に代表される新たな放射線防護体系の確立に向けた考え方に対して、世界で活発な議論が行われており、日本保健物理学会でも「ICRP 勧告検討委員会」を設置して、放射線防護体系の基本的な考え方を再検討すると共に、ICRP 等で提案されている新たな放射線防護体系についての検討を開始している。その一環として、平成 13 年 3 月 23 日に本ワークショップ

が、提案されている新たな放射線防護体系に対し、保健物理学会員が意見を交換し討論することを目的として開催された。

本ワークショップは、(1)放射線の健康影響(放医研土居氏)、(2)線量の考え方(サイクル機構 百瀬氏)、(3)線量レベル(福山大 占部氏)、(4)医療被ばくについて(自治医大 菊池氏)、(5)防護システムと原則(原研 加藤氏)の内容で講演が行われた。

(1)は現況を非常にわかりやすく説明され、導入として非常に有意義であった。(2)は非常にわかりやすく説明され理解が進んだと思う。特に気になった点として、新しい荷重係数の考え方は、合計を 1 となるような規格化を行っていないが、個人的な印象は規格化を行った方がわかりやすいような印象を受けた。(3)は印象として、クラーク提案のレベル区分と実効線量の範囲は幅を持った規制値を示しているが、幅を持った規制値をどのように規制に盛り込むのか。また、議論が続いているレベルと言う言葉を用いた場合、それが限度として扱われる恐れが依然として残る。公衆にわかりやすく説明するためにもシンプルナリスク係数のグラフの導入が必要ではないかと感じた。(4)は印象として医療被ばくの考え方については、依然として工学関係者と医学関係者の間に被曝の概念に温度差がかなりあるように感じられた。(5)は勧告が出される前に議論を行うという画期的な内容であり、我々専門家集団が積極的に意見を交換して行かねばならないということを痛切に感じた。

全体をまとめた私見として、確かに放射線発ガンに対するメカニズムの進歩など疫学の発展や、原爆被爆者に対するデータ蓄積など、新たに明らかになった事象は数多くあると考えられるが、過去に用語、モデル、パラメータを変更しすぎて混乱を助長している感がある。また、低線量領域における被曝の取り扱いや、各国の経済状況を反映した介入等の判断について検討すべき様々な問題があるとの印象を受けた。加えて、医学関係者と工学関係者の被曝に対する思想の違いなどは、今後、今後勧告を取りまとめていく上で議論の余地がある。

日本では、昨年1990年勧告が法令に取り入れられたばかりである。ICRPの勧告の影響力は非常に大きく、早い段階での議論は必要と思われるが、内容を早急に変更することには抵抗もある。例えば、複雑な変更を行うと、長期の開発期間をかけた内部被ばく線量計算コード等が無に帰してしまう恐れがある。ICRPの勧告は影響力が大きいので、哲学的見地からも理論をしっかりと再構築し、慎重な対応を行わないと、時間と資金を浪費する結果となりかねない。より良い勧告とするために、研究者が集い、議論することで今後役に立てることが必要不可欠で

あると感じた。

最後に、常日頃感じていることであるが、保健物理を初めとしたワークショップやシンポジウムの出席者の大半がベテラン研究者であると言うことがある。若い研究者や学生をはじめとした研究者の卵達には積極的にワークショップやシンポジウムに参加することを切に望む。一つの考え方だけでなく、様々な観点を持つ分野の人達と交流を持ち、議論することは必ずや自らの見聞を広げることが出来るであろう。

## アメリカ保健物理学会年會に出席して (東北大 中村尚司)

2001年6月10日から14日までアメリカのオハイオ州クリーブランドで開催された第46回アメリカ保健物理学会年會(放射線安全會議と展示)に招待されて出席しました。年會では、毎年1-2名の保健物理分野の著名な研究者を世界中から選んで、G. William Morgan Lecturerとして招待して講演を依頼しているそうで、今年の年會に私と英国ノッティンガム大学のChallis氏の二人が選ばれて招待を受けました。G. William Morganは保健物理学会の創立者の一人であり、原子力委員でもあった人で、学会に多額の基金を寄付している有名な人です。

クリーブランドは五大湖の一つエリー湖に面した町で、人口は約150万人で周辺を入れると約250万人ですから大都市です。学会が開かれた立派な國際會議場は湖のすぐそばの町の中心にあって、まわりも高層建築の建ち並ぶ綺麗な町並みが続いています。人が少なくても150万人もいるとは思えないほどひっそりとしていました。

空港からはRTAという高速電車がシティーセンターとつながっていて便利で、それが郊外にも伸びています。今回の学会には博士課程3年生の佐々木道也君と二人で参加しましたが、土曜日に空港に到着し、電車でシティーセンターに着くとモールにつながっていて、沢山の人が賑やかでした。ホテルはそこから歩いて5分位のマリOTTホテルですが、そのロビーで今回の学会に展示を出す富士電機の河野さん、関さん、小林さんに会いました。日曜日の朝に参加の登録を済ませてその辺りをぶらぶらした後、時間があるので、例の電車に乗って佐々木君とUniversity Circleにあるクリーブランド博物館に行きました。この辺は緑が多くて大学の建物がゆったりと建っているととても美しいところで、その中に池のある広い庭に囲まれた博物館がありました。博物館は想像以上に大きくて、展示品も古今東西を問わず多くて有名

なものもあり、さすがにアメリカの財力を感じさせられました。

学会は月曜から始まりますが、日曜にもProfessional Enrichment Programがいくつも開講されていて、各会場に数十名の人が熱心に講義を受けているのが印象的でした。このPEPは2時間の講義に40ドルを払って、保健物理に関連する基礎的なものから、新しいトピックスに至る内容の話を聞くものであり、保健物理分野の次世代を荷う若い人に学会が教育をするというものです。これを受けると受講証明書がアメリカ保健物理アカデミーから授与され、それが今後の経歴に寄与するというので、熱心な受講ぶりも理解できます。わが国の学会にも医学物理学会には医学物理士の認定という似た制度がありますが、残念ながら我が保健物理学会にはそのような力はまだありません。

月曜の朝はプレナリーセッションから始まりますが、最初の歓迎挨拶の後、William Morgan Lecturerの紹介がなされ、もう一人のLecturerは不在だったので、私だけが舞台の上にあがらされて賞状の楯が贈られました。急な話でびっくりしましたが、その後で知らない人から次々お祝いの声がかけられたので、これはとても名誉なことなのかと分かりました。次にオハイオ州選出の上院議員(共和党)が講演をしましたが、原子力エネルギーの推進を強く訴える内容のもので、環境への配慮からいってもアメリカとして原子力発電の割合を増やすべきであり、そのためにも保健物理が重要であると力説して、参加者から立ち上がるくらいの盛んな拍手を受けていました。日本では学会に国会議員が来て講演をするというのは聞いたことがないので、随分国情が違いました。続いて、DOEの関係者による原子兵器産業従事者の癌や圭肺症などの発症のコホート研究についての発表で、これも日本ではあり得ない研究です。最後はNRCの人が低線量被曝の防護の問題は論争の種にするのではなく、適切なレベルを設定するための政策決定に利用すべきであると結んで終了しました。

ランチは展示を出している会社からのサービスでランチボックスが出されて、午後からは展示とポスターセッションが始まりました。この会場は広くて、ここに90社近くの会社が展示を出していました。各社がコップ、ボールペン、キャンディなどいろんなものをサービスし、籤で賞品を出すなどの余興があり、説明員もTシャツ等のラフな服装でお祭りといった気分でしたが、展示ブースも多くて、日本と比べて随分展示に重きをおいていることが良く分かります。日本からは富士電機だけが展示を出しましたが、展示物が税関でのトラブルで初日に届かず、そこだけ何もないことになり、日本から

来た富士電機の人たちががっかりしていましたが、ようやく翌日朝に展示が出来て、しかも随分反響があって来た甲斐があったと喜んでいました。私も時間の空いたときに顔を出しましたが、私の居た1時間弱の間にも何組か特に中性子個人線量計や環境線量計について熱心に質問してくる人がいて、対応が大変で私も英会話のお手伝いをしてあげました。他にも日本でよく知られたアメリカの会社が展示を出していて、なかなか充実していました。

火曜の朝一番に加速器のセッションで私の招待講演があり、Present Status of Japanese Accelerator Safety という題で45分の講演を行いました。会場が4つに分かれていたこともあり、聴衆が多くはありませんでしたが、お世辞だとしても良かったといってもらえると悪い気はしないものです。この日の午後には、線量と放射線影響の閾値のない直線仮説についてのNCRPレポートについての発表があり、この会場だけはやはり他と比べて多くの聴衆がいました。発表を少し聞きましたが、英語を理解するのが大変でしたので、受付で販売されていたこれに関するNCRPレポートNo.136を2冊購入(1冊は甲斐さんからの依頼です)して、後でじっくり読むことにしました。

普通国際会議というと最近では日本人の参加者が全体の1割位いるものですが、今回は国内会議ということもあって、日本人の参加者は展示関係の富士電機の人を除くと、我々二人だけという珍しい経験をしました。知

っている人も少しでしたが、日本人が他にいないこともあって、食事やディナークルーズの時には知らない人と話す機会が多くて、これもなかなか面白かったといえます。とにかく最初の日に壇上へ上がって紹介されたので、皆に顔を知られたようで随分いろんな知らない人から話し掛けられました。アメリカ人はこの点気さくでいいと思います。

この会議に引き続いてスタンフォード大学線形加速器センターで中性子測定実験があり、私の研究室の学生が日本から来るので、佐々木君と一緒に一足早く水曜日にはクリーブランドを後にしてサンフランシスコに向かいました。思いがけないことから参加した学会でしたが、いろんな経験ができて、とても良かったと思っています。中性子測定実験のことはまた別の機会にゆずることにして、これで話を終わらせていただきます。

#### NewsLetter への会員投稿のお願い

NewsLetter には放射線防護、放射線安全管理に関する情報・話題や意見、関連学会・研究会の開催案内などタイムリーな情報を掲載しています。NewsLetter を会員相互の情報提供の場として利用していただくために、多くの会員からの積極的な原稿を期待しております。投稿内容などについては、日本保健物理学会事務局および最寄りの企画委員まで連絡ください。投稿原稿は電子メール(E-mail: jhps@wwwsoc.nacsis.ac.jp)で集め、企画委員会のインターネットグループによって編集印刷されます。

発行：日本保健物理学会企画委員会

編集：企画委員会インターネットグループ

担当：山崎 直